

会報

# 板垣会

第7号



若き日の板垣退助



# 板垣退助と谷干城

青山学院大学文学部教授 小林 和幸

板垣退助と谷干城、この二人を考える時、明

治期高知の歴史を知る方々は、その政治志向の違いや対立を思い浮かべられることと思う。それは無理もない。一方は自由民権運動を率いた民権運動の先駆者、他方は国家主義・保守主義者と語られてきているのであるから。

両者が政治的に競い合い、国家の内政や外交などの施策について大きく対立したことは確かにある。ただ、施策の先にある究極的な目標において、多くの人にとっては意外かもしれないが共通性があるように思う。

幕末から明治の初年、谷と板垣の歩みは接近する。まず、二人とも天保八（一八三七）年の生まれであった。土佐藩における身分としては、板垣の生家は代々馬廻格であり、土佐藩士の末子弟として生まれた谷とは、大きく隔たっていたが、幕末の激動は二人を近づけ、尊王攘夷から倒幕へという思いを一つにすることとなった。板垣が中岡慎太郎と西郷隆盛ら薩摩側と倒幕のため「薩土密約」を結んだとき、

谷もまた同席している。

戊辰戦争に当たっても、東征軍に共に加わり土佐藩兵を率いて、政府軍側の勝利に貢献したのであった。

二人の間に亀裂が入るのは、維新後の高知藩政（一八六九年の版籍奉還により高知藩に改称）をめぐるであった。東京の明治政府の要職についた板垣は、後藤象二郎と共に、山内容堂の信任を背景に高知藩政を中央から指導し、中央政界における膨大な活動費を藩費に求めた。高知では、藩札の増刷を以てこれに充てるのだが、谷は、藩財政の改革の必要を強く主張したことから、在京の板垣・後藤と在藩の谷との間で対立が生じることとなるのである。

明治三（一八七〇）年二月より高知藩少参事の地位にあった谷は、片岡健吉と共に高知藩財政の逼迫、民の疲弊を憂慮して、藩財政の再建を企てた。

一方、財政再建策に反し、在京の板垣・後藤は、藩札増刷により、積極的な方針で洋式病院

の建設などを企てたのであった。谷・片岡は藩の財政難を理由にこれに反対し、中央の板垣らの同意を得ることなくその建設を中止した。ここにおいて、藩政を、在京藩重役の主導から在藩の谷・片岡が奪取した形となり、両者の対立は不可避、決定的なものとなった。以後、二人は事ごとに対立することになるのである。

その後、谷は、廃藩置県後の明治政府に呼ばれ、陸軍を中心に経歴を積んでいくが、板垣は、いわゆる明治六年政変で多数の土佐藩出身者と共に下野し、翌年「民撰議院設立建白書」の提出に至る。板垣の行動は、民権運動がはじまるきっかけをつくった。

従来の谷に対する評価から見れば、明治六年政変で下野した板垣が主張する民撰議院設立の主張や、自由民権論に対して、思想的な点において、本質的に反対であったと目されている。しかし、それは、事実であろうか。確か



中年の谷干城

に前述した因縁によって、谷と板垣の関係は悪く、対立していたといつてよい。けれども、その表面的な対立に目を奪われてはいけない。実は、この間の谷による民権論に関する言及を子細に検討すると、従前の反民権論者としての評価とは違った側面が見えてくる。

西南戦争後、谷は高知に帰り、板垣と面会し、その様子を谷が養繼嗣乙猪に伝えた書翰が残っている。そこでは、以下の通り述べている。

婦来、板垣等を会谈合いたし候得共、彼の社に於ては段々行掛りの事もこれあり、何分見込の通り参り兼ね事も少なからず。尤、大体の処は同意の廉も少なからず、我等の考には彼の社も今日真に和氣平心にいたし只度存候得共、彼の愛国社と称し大坂え出張し各県の論客を集合等の事は勢、止み難き様子、是等の事を止めずんば、処詮、世上の疑を去る事は六つかしきと察せられ申候。然るに東西之郷士達は頑固にこそあれ、忠孝の道には厚く共に善を為すべきの見込これあり、此方は追々能く相成り申すべしと相楽み申候。只致方のなき者は旧郭中の御馬廻達に而、所謂磯にも付かず浪に寄す、実に因循姑息何とも申様これ無しと存せられ候。到底、大事を為すの氣力は曾てこれ無く、誠に歎息に勝えず候。(谷

乙猪宛谷干城書翰、明治一一年九月一日付、谷家所蔵 国立国会図書館寄託)

谷は板垣の考えについて「大体の処は同意の廉も少なからず」と述べていることに注目したい。板垣が考える方向性に同意を示しながら、一方で愛国社の挙動には、「世上の疑を去る事は六つかしき」と否定的に語っている。さらに「旧郭中の御馬廻達に而、所謂磯にも付かず浪に寄す、実に因循姑息何とも申様これ無しと存せられ候。到底、大事を為すの氣力は曾てこれ無く、誠に歎息に勝えず候」と語って、旧上層士族の「因循姑息」に深い嘆息を示している。

ここからは、板垣の主張の一部に賛同する一方、愛国社の反政府的政治活動は非としていることがわかる。それでは、谷は板垣の主張のどの部分に賛同していたのであろうか。それは、これより少し前の佐佐木高行が谷に宛てた書翰の中に一つの答えを見いだすことが出来る。その書翰の中で佐佐木は谷に「貴命のごとく真民権は勿論、議事も今日の世界の光景にては御国とても、早晚あい行われ申すべく候。また行われ候事しかるべしと存候」(谷干城宛佐佐木高行書翰、明治一〇年一〇月二〇日付 谷家所蔵 国立国会図書館寄託)と述べている。佐佐木は書翰の中で、「貴命のごとく(あなたのおっしゃる通り)」としているところから、この見解が谷の見解でもあるのは明らかである。

かであろう。文中の「議事」という言葉が指すのは、文意を汲むと「議会政治」を指すことは間違いないと思われる。

すなわち、これによって谷と佐佐木は、世界の情勢を考慮すれば、早晚、日本も議会政治を導入すべきと見ていたことがわかる。民権論者の最重要な要求である「議会政治」の導入につき、谷は同意するものであった。次第に専制的な施策を行う政府に飽き足らなくなってきた谷は板垣と同様、議会による政府の監督を目指すのである(詳細は、拙著『谷干城中公新書』)。

また、先に引用した乙猪宛ての谷の書翰末尾で記しているように谷が、問題とするのは、

### 谷・片岡の緊縮策



板垣と谷

むしろ改革を嫌う「因循姑息」であることも注意しておきたい。このように、対立が目立つ板垣と谷には、政治の方向性としての共通性は存在するのである。

したがって、谷はこの後、帝国議会開設後も、貴族院の子爵議員として、国家の発展を願いながら、藩閥政府と対峙し、国民の政治的な自由の拡大、日清戦後においては、軍備拡張や増税の批判といった国民重視の発言や活動を行っていく(その詳細は、前掲拙著ならびに拙著『国民主義の時代』角川選書を参照されたい)。谷は、「人間最終の目的は、平和にあり、自由であり、実に衣住食にあり」と言い切っている。谷を「国家主義者」とばかり評価することはむしろ間違っており、その考えは板垣と同じように或いはそれ以上であることに努めつつ、国民重視を求めるものであったのである。

また、板垣と谷の交流は、対立しながらも統



晩年の谷干城

いている。例えば谷の日記には、明治二四年六月一七日谷が板垣を訪ね、板垣が病気のため面会できないと、今度は板垣が二一日谷を訪ねて話をしたことが記されている。

また、有名な板垣の『二代華族論』には、板垣が華族の面々にこの意見書を送付した際、殆どの華族が回答してこなかったのに対し、意見は反対でも反論を公にした谷のことを、『二代華族論』の公刊にあたって特記し、谷には感謝の言葉を述べている(『谷干城遺稿』下、

七〇〇頁)。

明治日本において、国民の幸福には何が必要か、どのようにしたら国家の発展がもたらされるのか、その最善の方法についての模索や議論がなくては、答えは見つからない。板垣と谷、二人の競争や対立は、国民を重視する政治をもとめながら、切磋琢磨してより良い方策を見いだそうとして葛藤する真摯で誠実な二人であったからこそ起こったのではないかと思うのである。

## 板垣退助の「集会及政社法」違反事件調書



跡見学園女子大学准教授 真辺 美佐

宮内庁書陵部には、警視庁から宮内省に宛てて報告された、一連の史料群が存在する(識別番号五二二二七〇五二二三三七、五四八七二一、五四八七三〇)。初期議会期を中心に、約二〇冊にわたるものである。これらの報告書は、警察が密偵報告をはじめ様々なソースから集めた情報をもとに、政党やその要人の動向を明治天皇に報告すべく編集されたものである。警視庁用箋に記載されたものが多いが、なかには

「貴春」の文字が印刷された、天皇の閲覧文書専用の特製用箋(タテ罫線用紙)に清書されたものも存在する。密偵史料などのなかには、出所の不明な、信憑性の低い情報も含まれており、史料批判なくして使用することは危険であるとされるが、これら宮内庁の史料は、警察が諸種の情報のなかから確実ないし重要と考えられるものを厳選したという意味で、信用度が一段上がる史料であるということが



できる。ここで紹介する宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵の『近時民間ノ政況報告』（識別番号五四八七二）もその一つである。

本史料は、警視總監園田安賢から侍従長徳大寺実則に宛てた報告書である。内容は、一八九二年二月に自由党総理板垣退助と立憲改進黨領袖（代議会長）大隈重信が「集会及政社法」に違反したとして起訴された事件に関するもので、なかでも、板垣と大隈が東京地方裁判所から取調べを受けた際の一問一答形式の調書が筆写されている点で、板垣と大隈の言動が直接うかがえる貴重なものである。またこれら調書は、前述した明治天皇の閲覧専用の「貴春」用箋に特に清書されていることから、かなり慎重を期して写された報告書であると推察され、また内容的にも、自由党や立憲改進黨の機関新聞や『党報』にも記載されていない情報となっている。

そもそもなぜ板垣や大隈は起訴されることとなったのか。その発端は、第二議会前の一八九一（明治二四）年一月九日、自由党首板垣と立憲改進黨領袖大隈との会談にまで遡る。会談は、来る第二議会において、政府と対峙するために両党の聯合をはかるべく、両党領袖が面会したものであった。結果、両党の聯合は成立し、第二議会では、政府提出予算案に両党が強く反対、議会は約一カ月で



自由党党首板垣退助と立憲改進黨領袖大隈重信による両党聯合会談

解散されるに至った。両党は、一八九二（明治二五）年二月一五日の第二回総選挙においても共闘の姿勢を崩さず、政府当局からは激しい選挙干渉が行われることとなる。

そのようななか、『北陸新報』と『北陸自由新聞』に、板垣・大隈の両名が石川県の衆議院議員候補者を擁立する旨の広告が出された。このことをきっかけに、板垣と大隈は「集会及政社法」に違反したとして検事から起訴され、東京地方裁判所から召喚された。「集会及政社法」は、一八九〇（明治二三）年に七月二五日に制定された法律であるが、板垣・大隈の連名での広告はこの法律で禁止されていた政社間の連絡・通信にあたるのではないかとの嫌疑をかけられたものであった。

板垣と大隈に対しては同時に召喚状が発せられたが、板垣は選挙のため遊説中であり、先に大隈が取調べを受けた。大隈は病気を理由に東京地方裁判所に出廷せず、自邸で一八九二年二月一四日、取調べを受けた。尋問の焦点は、「集会及政社法」第二八条に関連して両党が連絡を通じて広告を出したのではないかという点にあった。大隈は、広告に関しては関知していない、しかし例えば候補者の方で、自由党から出馬するか、立憲改進黨から出馬するかを明確にせず、両党からそれぞれ出馬の承諾を得るといふことはよくあることだと答え、両党が連絡を取り合っただけで候補者を擁立したり広告を出したりしたのではなく、あくまで候補者自身が両党から承諾を取ったのではないかということをおわせた。そしてこれ以上の追及がなされることはなく、取調べは簡単に終了している。

一方の板垣は、三月一日に東京地方裁判所から召喚されたが、大隈に比して、取調べ内容が多岐にわたり、「集会及政社法」違反に関しても大隈のように第二八条（政社間の連絡・通信禁止）のみならず、第二三条（政社の役員配置義務）や第三四条（政社の発起人役員両方の責任負担）にも及ぶ内容について、執拗に追及された。

取調べは、まず「集会及政社法」第二三条と

三四条の違反に関連する尋問から始まった。自由党は政社であるかどうか確認された上で、自由党の役員をいかなる名称で呼んでいるのか、役員は何人いるのか、事務員や参務員は役員ではないのか、書記はどのような役なのか、集会及政社法に規定された役員をしつかり自由党に置いているか、実質役員にもかかわらず別の名称で役を担わせ責任逃れをしていたりしないかが取り調べられていく。

ついで第二八条違反の取調べに移り、遊説から東京に戻ってきている間、改進黨員とは面会していないか、(板垣が改進黨員の島田三郎と面会したと答えると)島田三郎とはいつ面会したのか、島田のほかに同席者はいなかったのか、改進黨員の肥塚龍とは会っていないのか、島田とはどのような話をしたのか、石川県の選挙のことは話題に出なかったか、島田の申立てによれば、板垣と面会したときに島田に同行した福田恒松が板垣に広告の許諾を得たと書いているが事実か、島田と福田の申立てによれば、板垣から返事は翌朝まで待つてほしいと言われたと言うが事実か、石川県の方から島田と肥塚に宛てた手紙のなかで大隈と板垣との連名の広告が必要だと書いたようだが、その手紙や広告文案を見たのではないか、板垣と石塚重平が新宿停車場から甲府へ出発する際(島田・福田と面会した翌朝)、島田と福田は

見送りに来たのではないか、その際、福田から広告のことをお願いされて承知したと言ったのではないか、板垣の申立ては島田や福田の申立てと著しく異なる、事実隠蔽だと分かると問題になるが申立てに間違いはないか、大隈と相談して候補者を定めたり、広告を出したりしたのではないかと息もつけなほどの尋問が次々と続けられていく。

さらに、『北陸新報』と『北陸自由新聞』だけではなく、『毎日新聞』からも大隈と連名で広告が出ていること、改進黨事務所や自由党事務所からも両党総理が広告を承諾しているという電報が出されていることなどの物証も突き付けられ、広告掲載日の板垣や事務所の動静を追及されている。

これらの尋問に対し板垣は、怒気を見せたり焦つたりすることもなく、始終、冷静に対応したようである。島田と会ったことは確かだが、もう一人のことは福田という人物だったかどうか覚えていないこと、広告のことを承諾して欲しいと言われた覚えがないこと、今回の広告のことは承知していないが、改進黨が自分の承諾なしに広告を掲載することはかつてもあったこと、島田と福田が証言していることには全く覚えがないこと、そのほかの広告についても知らないこと、電報内容も知らないこと、事務所のことについては石塚に尋ねて欲しいと

答えている。そのほかの尋問に対しても一つ一つ丁寧に答えている。

以上のように大隈と板垣の側には、尋問の姿勢という点で非常に大きな違いがみられることが興味深い。事前に、島田や福田が板垣と面会していたことが判明していたために、そこが突破点になりうると検事が考え、そのため厳しく追及したのかもしれない。ただし、板垣の回答について言えば、福田との面会については、板垣がシラを切っているのか、本当に知らないのか、はたまた記憶から抜け落ちたのか、その真相は定かではない。しかし、板垣、大隈といった政党首領が、容疑をかけられて取調べを受けるということはめつたにあるものではなく、レコードなどの音声記録のない当時としては、もつとも板垣の「肉声」に迫るような回答がうかがえることができる本史料は、非常に貴重なものであるということができよう。

ちなみに、事件の結末は、証拠不十分として四月一二日、板垣・大隈とともに免訴を言い渡されることになる。免訴となったとはいえず、実際に呼び出して取調べまでしたあたりには、当時の政府と民党との対抗の激しさ、激しい選挙干渉を行つてまで民党勢力を削ぐとした政府側の必死さが表れており、この尋問調書もそういう意味で、当時の政治情勢の緊迫感の伝わる一級史料ということができよう。



# 『板垣精神』編纂と「板垣研究」事始め



板垣退助 玄孫 高岡功太郎

## はじめに

平成三十年(二〇一八)は、明治維新百五十年を迎えると共に、板垣退助百回忌(薨去満九十九年)に該当する年であった。この年は板垣ゆかりの高知、岐阜、東京で錚々たる記念式典が催された。我々はこの栄えある節目の年に行われた事柄をつぶさに記録し、記念書籍としてまとめようと考えたのである。

この記念書籍『板垣精神』は、電子製版(DTP)用のソフトではなく、我々がごく一般的に使用可能なマイクロソフト社の「ワード(Word)」で製版原稿の大半の部分が作られている(画像の明暗調整は他のソフトも併用)。どうしても罫線の引き方が複雑となる系譜の箇所と表紙のデザインは、出版社にお願いすることになったが、その他の頁は、総て我々が所謂「トンボ付き」と呼ばれる「完成原稿(製版原稿)」の形で作成し、PDFファイルに変換して入稿したものである。出版社によ

る校正、レイアウトの作業が一切省かれたことで、最終原稿完成から出版に至る期間を、約一ヶ月半短縮することが出来、本来の出版費用より八十万円以上を削減することが可能となった。潤沢な資金を持たざる処から開始した百回忌記念事業であるがゆえ、ご協賛頂いた方々の浄財を一円たりとも無駄にはしないという趣旨を貫いての作業であった。しかも、過去から板垣研究の下積みがあったにせよ、十ヶ月間というタイトなスケジュールの中で、この記念書籍の編纂は開始したのである。

## 高知県立図書館は長期休館

折しも、この平成三十年は、明治維新百五十年に合わせて旧追手前小学校跡地に高知県立図書館が移転し「オーテピア」としてリニューアルオープンする予定であったため長期の休館。明治維新百五十年・板垣百回忌記念事業として編纂作業を行っている身には

大きな痛手となった。それゆえ、既に活字化された読みやすい資料は活用出来ず、それより古い時代の原本類に頼らざるを得なかったが、却つて様々な発見もあった。我々が目にした諸書は、木版、ゲラ刷り、ガリ版刷りの類や筆写本、絵草子、錦絵など多岐に亘る。其々が板垣のエピソードを語っているが、漢語調あり、口語調あり、講談調あり比較してみると実に奥が深い。ところが戦前戦後を境に、読みやすい文体で書かれたもの、流通に乗ったものばかりが史論の勢力を得、訓点註釈の施されていない旧字体、旧仮名遣いの読みづらい書籍は、時代の中に埋没し顧みられなくなってしまった。今や一般の人々が幕末明治の知識を得る情報源は、虚実綯い交ぜの歴史小説、ドラマの類からの解説本の孫引きの如きものが横行している。勿論、一部の研究者はひたむきに研究を続けてきたであろうが、アカデミズムと一般の乖離は著しい。良質の書は絶版されたまま、衆人の目に触れること無く虚しく時を過ごし、特定の史観に基づいた研究者が自説に都合の良い部分のみを抜粋して解説し吹聴する状況が続くならば、実に憂慮すべき事態となるう。

## 板垣顕彰の模範となる書籍を目差して

かつて高知から板垣研究家の先生が拙宅へ

お越しになられた時、板垣の遺品、戸籍謄本、写真、書簡などを一覽になられた。その中に、昭和四十三年に東京品川の板垣の墓前で挙行された『明治百年板垣退助先生五十回忌』の写真と資料があつた。それに目を通された先生は「五十回忌は随分と盛大にされたようですね」と驚かれ目を細められた。時の自由民主党総裁であつた佐藤榮作先生を名誉顧問として濟々多士の御参集ある中、品川の板垣退助の奥津城で挙行された式典があつた事を、この記念冊子は厳然と今に伝えていからである。東京芝の板垣退助肖像建立の際も、錚々たる御来賓各位が御臨席の中での除幕式であつた。

我が家に残る『明治百年・板垣退助先生五十回忌』の記念冊子は、趣意書、略伝、年表から成り、中岡慎太郎先生の手紙と「薩土討幕の密約」の果した歴史的役割、品川の板垣墓前に「板垣死すとも……」の石碑が建立された経緯などが簡潔明瞭にまとめられた記念冊子であつた。私はこれを読み解き、百回忌記念式典として現代に出来得る事を模索したのである。しかし、この冊子は式典当日に御列席者各位へお渡しする為に作成されたものであるため、五十回忌当日の様子はこの冊子に収録されてはいない。当日の様子は、残された写真と、祖父母、母から聞いた話に頼らざるを得ない。そこで、我々は百回忌を記念する書籍は、当日

の参列者だけにお渡しする冊子では無く、「板垣退助の百回忌が如何に催されたか、当日の様子が総て記録としてまとめ、後世の人々に伝える書籍」にしようと考えた。我々が五十年前の冊子を参考にして、百回忌を行ったように、五十年後の人々も我々の志を継いで『明治維新二百年・板垣百五十回忌』を奮起し挙行してくれるよう、その模範となるような書籍を編纂せねばならないと考えたのである。

### 出版社探しに難航

さて、云うは易いが行うは難し。我々は出版社探しから難航した。それは我々は大衆の前で華々しく堂々と演説する板垣の姿ばかりではなく、来客が帰り独り居間で佇む時に見せる、あるいは家族だけが伺い知るような、板垣の真の内面にまで肉迫した書籍にしようと考えたからである。我々は「記念書籍」たるものは売らんが為に面白可笑しく書かれている流通目当ての通俗書や、真実とはかけ離れた講談小説の類い、デザインだけは豪華に凝つていても中身の無い見掛け倒しの本であつてはならないと考えた。過去の苦い経験から、メディアの主観によつて内容が曲げられてしまうこともあつてはならないと考えたのである。ところがそうになると、引き受けてくれる出版社の

数は途端に限られてくるのである。

### 『立國の大本』を中心として

私は、およそ板垣の記念書籍たるものは、五箇条の御誓文「廣く會議を興し萬機公論に決すべし……」の文言から始まり、各界からの式辞を冒頭に掲げ、板垣精神の根幹たる「立國の大本」を骨格に据え、略伝、年表と、百回忌の内容を加え、写真と系図を附す事。百回忌に当り参集した子孫各家の感想などを収録したものを提案し、百回忌記念事業の会議に臨んだが、これは満場一致の賛同を得た。また、他書で書き尽くされた内容の再編のみで終るのでは無く、この書籍にしかない新基軸・新知見を有するものを収録すべきことを附言した。さもなくば、とても「記念書籍」として後世へ残り得る一冊とはならないであろう。私自身はかねてより日本語及び日本民族の起源に興味があり、Y染色体の解析に関してはその専門とするところであつた。板垣の遺伝子解析は、親族が集まる百回忌こそ好機であり、是非とも取り組みたいテーマであると考えたのである。(板垣退助の遺伝子解析に関しては『板垣精神』に詳述)

### 時間との戦い



良心的な価格で引き受けてくれる出版社が見つかったのが、平成二十九年の師走十二月。明けて翌年一月に出版社と契約を交わした。「記念書籍出版は百回忌の年の内に……」と考えていたので出版社に最終原稿から出版に至る具体的なタイムスケジュールを相談すると、「九月二十九日に挙行する板垣百回忌の箇所以外の全章を八月迄に完成」させ、なおかつ、「板垣百回忌の部分も十月末迄に原稿を完成させなければ出版には間に合わない」との条件であった。我々に残された期間は十ヶ月。しかし、私は執筆だけに没頭出来る訳では無く、並行して百回忌の計画と準備を進めなければならぬ。しかも、出版費用、百回忌開催資金を募る為に各種会合に足を運び、協賛者を増やさなければこの事業は成功しない。その為には、板垣勉強会講演会を主催し、百回忌開催の認知度を上げねばならない。著名な研究家を招聘する余力は無い。自らレジュメ、チラシを作り、勉強会を開催しなければならぬ。適材適所に役割を分担したいところであるが、私自身が先ず行動し、軌道に乗せて行かなければならない範囲が多く、優先順位を考慮し如何に自分の時間を活用するかを真剣に模索する日々となった。

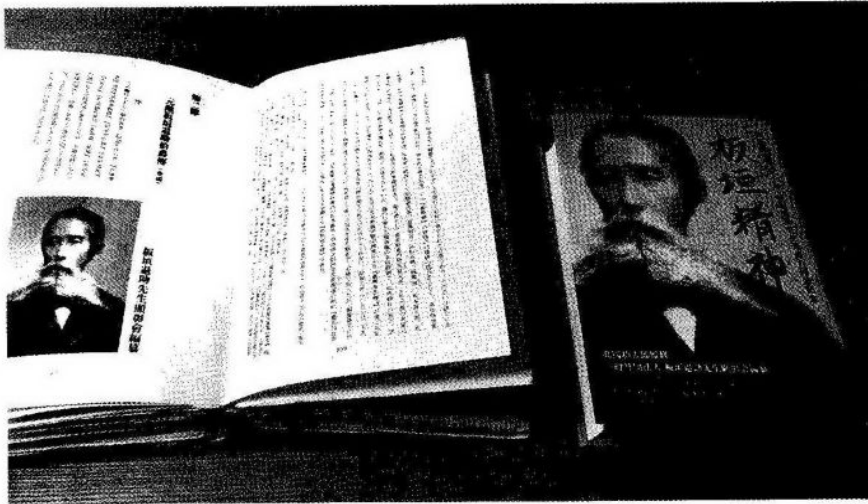
## 板垣退助系譜の読解とY染色体の解析

二月は手始めに記念書籍に収録する『立國の大本』の文字入力を出版社にお願いし、その間、私は板垣守正の嫡男板垣正明氏の元に飛んでDNAの解析に御協力を得、そのサンプルが米国ヒューストンの研究所に到着したのが同月七日のことである。結果を待つ間に支援者の力を借り、静岡の掛川、甲府の武田史跡を取材した。移動に際しても、常に書籍へ収録予定の資料を持ち歩き、徳川藩政期の史料に書かれている崩し字の読解を行った。その中には記念書籍へ収録した『板垣(乾)系譜』もある。これらは、私の曾祖父旧蔵のもので、山内家宝物資料館にも同様のものが収められているが、これまで板垣関連の諸書に引用されてきたものは、残念ながら略系図ばかりで、これら歴代系譜の全文が収録されたことは無い。理由は単純で、分量が多いのと全文が「御家流」という崩し字で書かれているので、板垣の研究者であっても、退助の部分を訳出するのが精一杯で、その他の先祖の部分は参考程度と位置づけられ活字化されてこなかったからであろう。折角史料としてあるのにこれが活用されないのは実に残念なことである。私はかつて学生時代、これを解説しようと試みたが、当時の私にはハードルが高く全く歯が立たなかった。だが何年も眺めるうちに、これらは当時の公文書として作成された物の控えて、多くは藩政文書に使わ

れる定形文から成り、退助と父の正成の譜内に同様の文言があることに気づいてからは、それらを手掛りに字形を比較することで次第に崩し字に慣れ、少しづつ読めるようになった。しかし、いくら頑張ってもあと数文字、固有名詞の箇所、自力では読解不能な文字があった。たった百五十年前に、我々日本人が使っていた文字が今はもう読めない。実に恐ろしいことではないか。ならば、今から五十年後、百年後の人々はどうだろうか。出来ればこれを読めるうちに読解し、活字化して書籍に収録したいという思いがあった。そして、これらの系譜を科学的な視点から査読したいと考えたのである。系譜で書き継がれてきた内容を尊重しながら、同時にDNA解析の結果を対比して載せることが、今後は歴史学の分野においても、両輪の車のように必須となることであろう。

## 間違いだらけの橋詰版『板垣伝』

三月に出版社から『立國の大本』の入力が終わったとの連絡が入ったが、原本で印字不鮮明の箇所があり、加えて出版社は旧字体の入力に不慣れ、漢籍や旧仮名遣いの分かる人も皆無との状況で、必然的に監修者である私が入力を一字一字チェックし、読み仮名を振り、註釈を加える作業も担当する事となった。



(左) サンプル本 (右) 完成版  
『板垣精神』高岡功太郎監修・一般社団法人板垣退助先生顕彰会編纂

記念書籍は、紙幅の関係から簡潔に書かれている橋詰延壽版『板垣退助』を「略伝」として収録しようと考え、「立國の大本」の文字入力が終わった出版社に、この文字入力をお願いした。その間、私は既に著作権保護期間の満了した五車樓版『自由黨史』の中から記念書籍に抜粋収録する箇所を選定。四月に出版社から橋詰延壽版『板垣退助』の入力が終わったとの連絡があり見直し作業に入ったが、そこで

驚いたのは橋詰版の『板垣伝』は非常に杜撰であるということであった。まず冒頭の一頁目から実例を挙げれば、

「…伯の先祖は板垣駿河守信形である。信方は甲州板垣村から出た武田信玄の名將で、天文十六年上田原の役で戦死した。その孤児が正信である。正信は侍臣に援けられ乾彦作を介して掛川の山内一豊に仕えた。それでかりに乾姓を名乗つたものである。関ヶ原の戦後山内一豊が土佐に移封されると、乾正信もつきしたがつて土佐に來た。領知千二百石である。ところが正信には子がなかつたので一豊のいとこ刑部一照の二男正行を養子とした」とある。この中にいくつ間違いがあるかお分かり頂けるだろうか。

①板垣信形の討死は「天文十六年」ではなく「天文十七年」が正しい(また諱の表記も当時の史料からは「信形」ではなく「信方」が正しいとされる)②「乾正信」は信方の子ではなく孫の世代の人物である。③「山内彦作(乾和信)」は天正十三年十一月二十九日(一五六一年一月十八日)に発生した近江長浜地震の際、一豊公の息女・與禰姫を庇つて殉死しており、天正十八年十月七日(一五九〇年十一月四日)、遠江国掛川へ一豊公が移封された当時、家老職にあったのは「彦作」の弟の「山内将監(乾和三)」である。④藩政資料によれば、

乾正信が土佐移封の時に賜ったのは、「千二百石」ではなく「千石」で「内二百石は鉄砲知」と書かれており、「千二百石」は明らかに古文書の読み間違いである。⑤「山内刑部(永原一照)」は、末席家老で「山内」姓を名乗っていたが、本姓は永原氏で一豊公の従兄弟ではない。等々冒頭の敷衍にしてこれだけ間違いがあるし、遡れば宇田友猪らが書いた『板垣退助君伝』の頃からあった間違い箇所が、延々孫引きされて來た部分もある。歴史資料と比すれば容易に判る間違いであるにも関わらず、長年に亘って訂正されず橋詰版『板垣伝』は子供でも読めるような平易な文体で書かれている為、非常に普及し、さらに諸書に引用され今に至っている。

板垣のエピソードとして著名な『会津落城と芋の話』の部分を見てみよう。会津落城後、松平容保に芋を献上に來た農夫を見て、二川元助(阪井重季)ら土佐藩士は「忠義の農夫」と褒めたが、それを聞くや板垣は慨歎し「本当に忠義の農夫であるならば、なぜ、国が滅ぶに當つて、自らの主君を助けようとしなかったのか。戦乱の時は、己の命を惜しんで我先へと逃げ去り、国が滅んでから一籠の芋を届けたぐらいでは、到底『忠義の農夫』とは云えない。しかし、なぜ彼等農夫(庶民)は自分の国が滅ぼうとしても無関心だったかを考えた時、これは会津藩における身分格差が激しく、主君



と苦業を共にするという感覚が欠如していた為であろう。これは、会津だけに云えることではない、日本の将来を考えた時……として板垣が「四民平等」の思想に覚醒するのであるが、これは、戊辰戦争後の板垣精神の根幹部分であると云っても過言ではない重要な部分である。にも関わらず、橋詰版では、「伯は二川から（農夫のことを）聞き大いに感動した。（中略）会津は今一般存亡の危機にある。（中略）殿様を氣の毒に思うのはただこの百姓一人である」と、『忠義の農夫』に感動して「四民平等」の思想に覚醒したとあり、「慨歎」したのか「感動」したのか、話の筋書きが一八〇度真逆になつてしまつてゐる。因みにこの「会津落城と芋の話」は、『自由黨史』、『会津戦争』の序文、その他にも筆録され、板垣自身が演説で何度も述べていることから本来、解釈の差異の入る余地は無い。にも関わらずこういった間違いが起きるのはどうしてか。その他にも橋詰版は主要なエピソードが抜けていたり、話の結論が真逆になつてゐる致命的箇所が随所にあつた。しかし、この橋詰版の『板垣伝』が普及したことにより、淨財が集まり戦後高知城公園の板垣像が再建できたのである。我々は板垣顕彰に携つてこられた先輩たちの熱意と努力に感謝し、学術的な研鑽をより深めることで明白な誤りを訂正し、彼等の本来の意思を継承せねば

ならないと考えたのである。この時点でメ切まで残り半年。略伝収録の件は振り出しに戻り諸書を比較し良書を探す日々となつた。

### 理事長と監修者という重責

『自由黨史』に読み仮名と註釈を附けながら思つた事は、正しく入力されているか確認をし、読み仮名を振っていくのは、そもそも最初から自分たちで入力するのときほど労力は変わらず、そうなる、出版社に入力して貰う費用（一文字／二・五円）を考えると余り効率的ではないという事であつた。それゆえ、それ以降は古書からの引用も含めて我々が入力することとなつた。しかし、そうなる、と我々に残された時間は少なくなるばかり。その頃になると、私は人間関係の交流を一切遮断し、山奥か離島に引き籠つてでも編纂作業に専念しなければならぬと言ふ使命感と、人間関係の交流を広めて新規開拓に専念し、百回忌記念事業を推進しなければならぬと云う相矛盾する責務に悩まされるようになった。どちらの作業も誰かに丸投げして出来得るものではない。書籍の中に引用文や註釈を一つ附けるのでも、どの書籍にどこに書かれているか、監修者である私の確かな指示を出さないと、誰も作業が出来ない。私の指示が曖昧だったり、間違える

と皆に影響を及ぼしてしまうからである。私の家の何処にその資料があるか等は、他人に指示を出すよりも自分でやった方が早いのかもしれない。しかし、それは結果として自分さらに仕事を抱え込む事になる。そういったジレンマとの格闘の日々を過ごした。

加えて理事長と言う役職は、編纂作業だけに没頭出来る訳では無く、月一回の会計報告、総会資料の作成などに加え、記念事業推進に当たつて、諸問題を如何に解決するかの案を練りコンセンサスを得て行かねばならない。法務局関連の登記のこと、税金のことや、案内状、御礼状を一通出すのも案文を作り、各方面に打診するにも優先順位を考え各種の氣配りを情れない立場にある。そうで無ければ、とてもこの様な「百年」を冠する記念事業は成功し得ない。私を含め私を支援し協賛して下さる方々、弊会を手伝ってくれる仲間たちに、百回忌のあるべき姿を差し示し、幾つもの非常事態と迂回案を想定し、如何なる事態が起きても即座に対応できる策を練っておかねばならないのである。

### サブクレードの解析

三月十日（米国時間）に、ヒューストンの研究所から一万三千六百十二箇所の一塩基多型

(SNP)に関する解析完了の報が届いたが、板垣のランチは世界的にまだ殆ど研究の及んでいない箇所からの分岐を示すものであった為、縦列型反復配列(STR)の解析を依頼した。四月二日(米国時間)に二一箇所解析完了の結果を精査し、さらに稀少プランチに属している確証を得たため、世界最高精度を誇るFTDNA社の「BIGY」へ解析を移行。研究未発達領域が特定されれば、「YFull」で更に解析精度を深め、国際的に登録されるまで解析を進めようと考えた。

## 書籍は二章から書き上がるものではない

休日、早朝より編纂作業に没頭したが、ふと窓の外を見ると真つ暗なので不審に思い時計を見ると、既に夜の十一時になっていた事など度々で、まさに三度の飯も忘れて編纂作業に没頭した。外出先ではスマートフォンフリック入力で執筆を行い、それを自分宛ての電子メールに送り、Wifi環境のある処を見つけては持ち歩いているノート型パソコンで受信し、ワード上で合体させ、読み仮名を振る。PDFファイルに変換し、コンビニエンスストアのコピー機を使って冊子型に印刷。実際に書籍になった時の字配りを確認しながら作業を進めた。しかし、書籍の編纂でも、執筆でも、戦略を立てるのでも、

夜を徹して時間を詰め込めば機械的に出来あがるものではない。良いものを作ろうとすれば、創意工夫が必要となり、適度に睡眠を取り、頭をスッキリさせた状態で無ければ中々良い案は浮かばないものである。

『板垣精神』は六章仕立ての構成だが、原稿というものは第一章から出来るものではない。この本に関しては、二章と五章が先に出来たが、出版社は「九月中旬に一章から四章までを先に仕上げてくれ」と言ってくるのである。なぜ一章から出来無いかと言うと、原稿というものは、手元に資料がある順に仕上げて行くからである。四章は写真が入るし、その写真も、元データはカラーだが出版書籍では白黒になるので、その為の明暗調整などをしなければならぬが、執筆に多忙でその作業に入る時間がない。また文章の加減で写真を何枚入れる余裕があるかも分からない。さらに配置するに当たっても写真の順番の兼ね合いもあり、出来れば画像関係の作業は、あらかじめの執筆が終わってからまとめて行いたい。加えて、序章には百回忌の祝辞などを入れる予定であるが、この段階では百回忌も開催されておらず、何も書きようが無い。もつと言うならば、祝辞が頂けるか、無事に百回忌が開催出来るかすらも確実ではない。この時点で出来るのは、せいぜい何文字ぐらいの分量かを想定し、何頁ぐらいを

空けておくか、次の章が右頁始まりか左頁始まりかの目星をつけておく事が出来るぐらいなのである。出版社からは「何日迄に何章を仕上げたい」との連絡があったが、人手不足でメ切的通りには原稿は完成せず、出口の見えないトンネルを進むような暗鬱たる日々の中、「十月末迄に巻返して帳尻合わせる」と自分に言い聞かせての作業であった。折しも、この年は大きな台風が二回、地震が一回と天災にも見舞われ、我が家は四日間の停電。街中の信号機も消え、真つ暗闇の被災生活となった。

## 多数の難題に直面しながらの編纂作業

ワードで文字を入力した事はあっても、いざ書籍を作るとなれば大変である。オートコレクト機能によって自動でインデントされてしまう事から始まり、旧仮名遣いを入力しているのに、現代仮名遣いに変換されてしまったり、祝詞の萬葉仮名の小文字部分はどう入力するのか、漢文の返り点はどうやって入力するのか、分からない事はばかりであったが、周囲の人に聞いても知識も経験も乏しく、やむなく孤立無援を覚悟し、一つ一つ創意工夫することで解決し前へ進んだ。また、九月から、十月の前半は、東京品川百回忌の準備、及び、その後の御礼状の発送その他に忙殺され、原稿の執筆は殆ど



出来ない状況が続いた。記念書籍の巻末には、板垣がハーグへ送った平和に関する文書の英文を掲載予定であったが、その英文を掲載した資料が見当たらず、高知の自由民権記念館へも問い合わせたが「全く分からない」との回答であった。（※この全文が見つかれば、『板垣精神』続篇に是非とも掲載したいと考えている）

## 文字数のダイエツト

一章あたり、約七十頁程の分量で、想定よりも内容の濃いものがようやく仕上がりがつあつたが、安堵の気持ちとは裏腹にもう一つの懸念が持ち上つた。八十三歳の生涯を全うした板垣を書籍にまとめようとするならば、一年を二頁に凝縮しても一六六頁となる。当初二百頁で見積りを取り、頁数が増えた時の為に五十頁分の余裕を見込んだ予算であつたが、原稿はその三倍の分量を悠に超えていたからである。まだ総ての頁が出来た訳では無いが、執筆と並行して既に書き上がった部分の文字数を減らす作業も開始した。具体的に言えば、『立國の大本』など、歴史的書籍の収録部分は触らないが、今回我々が執筆した新たな箇所に関しては、句読点を減らし、平仮名書きの部分に漢字を変え、冗長な言い回しは端的な表現に改めた。章扉は「何章」とだけ

印刷し、裏面は白紙、左頁から始まる予定であつたものを章扉の裏側の右頁から文章が始まる型に改め、また章扉の下側部分に写真を入れる事で、余白のスペースを有効活用。掲載予定の写真の中には諸書でも掲載されたことの無い貴重なものも多くあつたが、泣く泣く割愛することにした。目次は三頁分想定していたのを二頁にし、板垣の百円札の事など、本書でなく他書でも情報を拾い得るものも割愛し、記念書籍として必要な要素は何たるかを自問自答しながら読み直し文字数を減らした。「子孫の記」の部分も大幅に写真を減らし、更にこの部分は二段組み八ポイントにして頁数を減らした。それで六百十六頁に収める事に決まったのが十一月の終わりの事である。

## 原稿の完成と誤字脱字のチェック

苦難の末、最終の最終と云われていたメ切の十二月十六日に、正に帳尻を合わせるかのように総ての頁が完成した。けれども、全く見直しが出来ていない。出版社に直ちに連絡し総ての頁が完成した事を告げた。又、全く見直しが出来ていないので、「見直しに一日欲しい」と告げると、出版社からは劳いの言葉と、「二週間見直しの期間を取るので、全く誤字脱字の無い完全な状態にして欲しい」との言葉

を頂いた。出版社は「二月十一日出版は約束する。表紙のデザインも仕上がっているので、確認して欲しい」との事であった。しかし、確認作業は見るたびに誤字脱字、改行のおかしい所、文章のおかしい所が見つかり、それらを訂正して、再度、PDFファイルに変換しファイアーストレージで出版社に送った。ところが、「もうこれで誤りは無い」と思つて送つたのに、後から後から見直すたびに誤字脱字が随分この様に見つかるのである。六百十六頁あるのだから、十頁に一文字の間違いでも六十カ所近くになる。出版社にPDFファイルを繋げる作業をお願いし印刷所に送るのだが、「十二月二十七日の仕事納め迄に印刷所に送らないと、来年二月十一日の出版には間に合わない」と。出版社の担当者も、我々以外の案件も抱えているので無理も云えない。最終章の協賛者芳名の部分は紙面の関係で三段組みにしているのであるが、何故か三段組みにすると頁番号が連番ではなくバラバラになると言う奇妙なエラーが起きた。しかし最早原因を究明する時間は無く、止むを得ず思いついた方法は、最後の六頁は一頁づつバラバラのファイルとして作り直し、PDFファイル変換した後、結合作業は出版社側で行って貰うことを交渉し、了解を得た。

## サンプル本の作成

書籍原稿のファイルは、バラバラな状態で出版社に電子メールで送る形になったので、どれが新版で、どれが旧版か、非常に複雑な構成となり、こちらの意図が的確に伝わるように、実寸サイズのサンプル本を二部作成し、一部は出版社へ、一部は私の控えとした。六百頁分を小分けに冊子型印刷したものをスティック糊で張り合わせ実寸サンプル本を作るのである。これ出版社へ持参したことによって、メール、電話での出版社との意志疎通が図りやすくなった。書籍の葉紐の色から、カバーを外した本の表紙部分にある板垣家の家紋の大きさといった細部に至るまで我々の意向を先方に伝えることが出来たのである。

### PDFファイルの形式不致、左右の余白の逆

これで私の職責はやっと済んだと思った矢先、出版社から「PDFの形式が違うから印刷が出来無い」と緊急連絡が入った。PDFファイルにも幾つか種類があり、直接印刷所へ投稿可能なPDF方式では無い方法で作られているとの事であった。ここからが、又、一苦勞であったのだが技術的なことになるので詳しい事は割愛する。PDF問題が片付いて、PDFを繋いだ状態でデータが届いたのが十二月二十六日、夜を徹して確認していると、ある不

審な事に気づいた。二段組みにしたある頁の終わりから後半の五十頁程が頁番号は正しいが左右の頁の合わせ目が逆なのである。書籍は本の綴じ目(喉と呼ばれる部分)の余白を広めに取らねばならない。左頁奇数、右頁偶数の並び順は合っているのに、余白の広さが左右逆になってしまっているのである。ワードの元データを確認するとその時点で既に逆になってしまっていた。原因は不明で究明の方法も分からず、止むを得ず二段組みの箇所とそれ以降の頁を独立させて作成。再度PDFに変換。ファイアストレージに保存して出版社へ送った時には、既に朝の七時であった。

### 終わってみれば、生みの苦しみも総てが人生の教訓に

昔は本を書けば「先生」と呼ばれたものである。パソコンがある時代でも、これだけ大変なのに、昔の人はどれ程大変だったのだろうと痛感した。同時に一冊の本を作るため、板垣と言う人物の生涯と真剣に向き合っただけあって、私もそれなりに詳しくなった。そしてこの記念書籍の出版に協賛して下さった方々との、実に様々な波瀾万丈の人間ドラマがあった。これらに関しても本が一冊書ける程の話があるのだが、今は紙幅の関係から割愛する。だが一

つだけお話しすれば、百回忌記念事業に理事として全面的にご協賛をいただいた草刈健太郎社長のご協力無しではこの事業は成し得なかつたと確信している。草刈社長は、アメリカで令妹を殺害された被害者でありながら、今は加害者を恨む葛藤を乗り越え、刑務所に服役している受刑者の社会復帰に取り組む活動をしておられる。そして、それらのことを書き綴った手記をこのほど出版された。この板垣百回忌記念事業にご協力を賜わった各位は、各方面でそれぞれの道を歩み活躍しておられる



「板垣精神」出版記念祝賀会(平成31年3月2日)



方々の集大成となり達成することが出来たと確信している。私は百回忌記念事業を通して、それらの人々との出逢えたことが何よりの宝であると感している。

また、私自身が今まで考えていた「板垣退助」と言う人物より、幾重にも深みを増して、彼のその偉業を実感することが出来た。板垣退助先生顕彰会の建て直し、百回忌記念事業の推進、そして『板垣精神』の編纂は、私にとって板垣研究の事始めであつて、その達成点では無いことも痛感した。板垣のDNAは世界的にまだ研究が及んでいなかった枝として、令和元年六月十日にISOGG (The International Society of Genetic Genealogy) に承認され、分子人類学にも貢献することが出来たのである。

## むすび

かくして、私の人生初の出版事業は稔り、書籍として完成した。協賛者、関係者の方々へ出版御礼としてお送りしたのだが、その時はまるで長年育てた愛娘を嫁に出す父親の如き心境であつた。書籍は早速反響があり、皆それぞれに喜んで頂けた。毛筆直筆での御礼状も幾つか頂いたのだが、それらの方は、錚々たる各界の大家、諸研究の大先生方であつた。板垣会の谷先生からは、劳いの言葉と高知城を描

いた貴重な油絵を賜った。書籍を出版した人にしか分からない見えない苦勞がその行間から伝わったからだろうか。多方面の方々より、お祝いの辞を賜り恐縮している。『板垣精神』は高知新聞で報道された他、ウエヴサイトからも、かなりの反響があり、三月に大阪のホテルで催した出版記念式典へは高知市長を初め、各界から祝電が届いた。この記念書籍は今や海を越え、オックスフォード大学ボドリアン図書館、ベルリン国立図書館、オーストラリア国立図書館、ブラジル・ポルトガル王立図書館を初め海外にも架蔵される事となった。『板垣精神』が時を超え、場所を越え、広く人々の心に伝わる事を期待して止まない。

## 乾（板垣）が西郷との約束を果たした話 —薩土討幕密約同盟雑話—



高知・板垣会副会長 谷 是ただし

## その頃の政治状況

乾退助（板垣）は当時、騎馬術修行」という名目で、江戸に在った。二度目の出府である。

一方後藤象二郎は土佐商会の統轄を命ぜられ、長崎に赴任していた。これは容堂の命を受けた、この二人が、かなり厳しい態度で主導し、武市瑞山以下の土佐勤王党を処罰したこ

(注) (1) 『豊公紀』に「天正十三年十一月廿九日（二五八六年一月一八日）於江州長浜宇内、大地震。山川転動裂壊家屋、顛潰長濱之御城殿崩、與欄姫様喪亡、御歳六歳。号光景妙円。是、見性院様御腹子也。此時、御家人乾彦作和信始数拾人死」とあり。

(2) 宇田友猪は「板垣退助君伝」、「板垣退助君傳記」等で「信州板垣村」と書いているが「板垣村」は「信州（長野県）」ではなく「甲州（山梨県）」の間違い。宇田は膨大な資料を以て美麗な文章で大著を完成させ、その価値は今も揺るぎ無いものであるが、大著であるがゆえ後学の検証・査読を経ずそのまま各著に引用されている箇所もある。橋詰版は上記「信州」の誤記は訂正されているがその他の箇所では、宇田の間違いを踏襲している部分もある。

とによる。その頃土佐には勤王党の同志が、雲の如く雌伏して在居、いつ復讐に会うかわからない状況にあった。それを心配した藩が、二人をあえて藩外に出したのが、真相ではなかったかと言われている。

この期間中、退助には大きな出合があった。中岡慎太郎と出合ったということである。中岡は当時石川清之助とも言ったが、これこそ幕末の志士として諸藩を廻り、情報を探り、人間関係を構築して来た人間で、政治の先を見通す透徹した理論も所持していた。彼は薩摩では藩士吉井友実(幸輔)などとも親しく、長州などの情報にも詳しくあったから、自分の見聞きして来た事実を、出府してきた退助に詳しく語り、大きな感化を与えたと考えられる。

当時、幕府による、長州再征は失敗に終わり、慶応三年(一八六七)五月、京都における四候会議(島津久光、松平春嶽、伊達宗城、山内容堂)も不調、失敗し、今後、政治をどうするかという、真に渾沌とした状況にあった。退助は吉井友実あたりから情報を得て、急遽江戸から京都に駆け付けたのは、この時である。五月十八日、福岡孝弟、中岡慎太郎、芸州藩士船越洋之助らが「近安楼」で歓迎。翌日谷守部(干城)毛利恭助らと料亭「大森」で会合、中岡からは「もう、これからは討幕拳兵

でいかなければ、始末がつかない」と聞いた。五月二十一日には西郷隆盛を紹介されその夜、御花畑にある小松帯刀の屋敷に、退助を案内した。その場で、西郷、吉井も同座、時局を論じ、「討幕拳兵」の確約へと話が進んだ。これは、藩と藩との公約ではなく、西郷と乾との個人的な密約である。

「もし、幕府との戦いになったら、退助どん、おはんは土佐勢を率いて加勢をしてくれんか」「よし、わかった。もしそういう時が来たら、ワシがやる」という約束であった。

同席した谷守部(干城)毛利恭助などが「この事実が、容堂に知れて、失敗したらどうするか」と言えば、退助は「ここにいる土佐人は、全員腹を切れば、それですむことよ」と平然と言いつつといわれている。

五月二十二日退助は、容堂に謁見、現下の情勢を論じ「今、決することがなければ、君公も、馬を薩長の陣門につなげるようになりまするぞ」と容堂の決意をうながしたが、「退助、またも大言壮語するか」と苦笑するばかりであった。

容堂は容堂で、この時期、大政奉還という大芝居を考えていた。それは後藤象二郎、福岡孝弟、寺村左膳、神山左多衛らの側近を使って、話し合いの中で、政権を朝廷に返還する手段を考えていたのである。



「もし、幕府軍との戦いになれば、貴殿は土佐勢を率いて、加勢に来てくれぬか」と西郷隆盛

「うちは長州や薩摩と違う。長州は中国地方を征服していたのを、徳川幕府に、萩一国に縮められた。薩摩も九州をほぼ征服していたのに薩摩一国に伏せ込まれた。その恨みはある。土佐は、関ヶ原の戦いには、さほどの軍功はなかったとはいえ、掛川五万石から土佐二十万石(当時)に抜擢されたのだ。徳川には、恩がある。徳川を表面上は、立てながら、実質的には政権を移行さす方策を進めるべきだ。今、国内で内戦を起こしたら、外国の干渉を受け、格好の餌食となる。將軍は、今で言う実権のな



いゝ名譽総裁のような型に祭り上げておいて、実質的には政権を移す、これこそが最良の道である」という、一貫した考えを持っていた。

## 険阻な山越え

山内容堂の「大政奉還建白書」提出は、後藤象二郎ら側近の苦心と坂本龍馬の「裏面工作」などにより成功した。王政復古が決定し、歴史的な無血革命が成就したのである。これは衆知の事実だから、ここでは述べない。しかし、その後の「小御所会議」では、討幕をめざした岩倉具視や薩長勢力の論破の前に、容堂の意見は通らず、重なる朝廷側の要求に不満を持った前將軍・徳川慶喜は、返事をせずに二条城から大阪城へ引き揚げた。他方江戸では、薩摩の謀略による火災が発生、薩摩憎しみの声が大坂城内に満ち、旧幕府軍は京都に向けて進軍する「鳥羽・伏見の戦い」が始まる。これは薩摩の挑発に、慶喜がのつてしまったと言えるだろう。後は歴史の示す通りである。

十二月二十八日、西郷は、土佐藩士谷守部（干城）を呼んで「いよいよ始まりもうした。貴殿は至急土佐へ帰って、乾に報告してくれ。あれとは約束がある。約束を果たせと……」と告げたのである。

谷は一切の事情を知っている。一月一日同

志森脇唯次郎と共に、大阪から讃岐に渡り、川乃江経由から土佐の高知へ着いたのが一月六日であった。乾も「うん、そうか。あれとは約束がある。わかっている」とすぐ藩兵の召集にかかった。藩としてもすぐ兵を上京させねばならない事情があった。

家老・深尾丹波を総督に、乾は大隊指令、仕置役（役知百八十石）に命ぜられ、八小隊、郷士階級を主体とした六〇〇名である。急に召集をかけても兵が集まらない。なにしろ徳川治政二八〇年ばかり、大きな戦争がなかったから、武器もなければ、銃砲も乏しい。しかし、郷士階級を中心とする下級武士は、永く上級武士層に差別を受けてきただけに、今こそ、自分たちの力を上士に見せつける絶好の機だと、意気込んで参加する兵士も多かった。

右半大隊司令・片岡健吉、左半大隊司令祖父江可成、大軍監・小南五郎右衛門、森多司馬、小軍監・谷守部、谷兎毛と軍勢を整えた。一月十三日、致道館に集合。藩主の関兵激励を受け、征途についた。名を「迅衝隊」としたが、時に退助は三十二歳。六〇〇名では兵力が乏しかったが、他に松山藩への遠征がある。あの城は一〇〇〇名の兵がなければ、陥落する城でない。「うちは六〇〇で良い。丸亀は外様藩だから、話し合いで開城できる。ともかく一刻も早く上京しなければならぬ」その一

念であった。

険阻な四国山脈の笹ヶ峰、立川から歴史に残る大雪の中、六門の大砲を引き上げる行軍は、難行苦行の連続で、一同死ぬる思いで川之江に出た。片岡、乾三四郎を先発の軍使に立て、丸亀城の開城を実現し、退助の計算通り、丸亀藩兵三〇〇と多津藩兵一〇〇を加えて、一〇〇〇名の兵力で、高松城に迫り、様々の軍略をはかって、ついに開門に至らした。四国では一兵の損傷もなく、平和裏のうちに、京都に至ったことは、乾の戦略家としての能力を十分発揮したものと云わねばならない。

京都に着いた土佐勢で、乾は西郷との約束を見事に果たしたと言えるが、以後、西郷は



大雪の中、六門の大砲を引いて、  
「笹ヶ峰」を越える「迅衝隊」600名の行軍

東海道、乾は東山道（中仙道）を行軍する。苦戦を重ねながら、その縦横無尽の戦略振りは、以後の歴史が示すとおりである。

中岡慎太郎、吉井友実あたりの仲介による、西郷、乾という有能な二人の男の出合が、後の歴史を大きく型造っていく、運命の不思議さを感じるものは、私一人であろうか。

## 事務局だより

### 岐阜板垣会名誉会長・澤田榮作氏逝去

岐阜板垣会の会長として、二十年以上に亘り、岐阜公園板垣退助像の前で、毎年記念式典を主催し板垣顕彰に努められてきました澤田榮作氏（現・名誉会長）が、令和元年十月十九日享年八十七歳で逝去されました。澤田氏は、高知へも何度も足を運び高知板垣会との交流も深められました。板垣退助が日光東照宮を守ったことから、数年前から岐阜東照宮の再建に向けて岐阜東照宮奉賛会を立ち上げられ、令和二年十一月建設落成予定の矢



先の出来事でした。謹んでご冥福を御祈りいたします。

（高岡功太郎）

### 高知・高野寺境内の小堂について

高知市天神町商店街の中ほど、高野寺境内地に二基の小堂が建っています。右方は大日如来さま、左方は明神さまが鎮座しています。大日如来さまは慈悲の光明を照らして衆生の安心を、明神さまは土地の守護及び商店街繁昌の神としておまつりしています。また大日如来さまの小堂には、板垣退助伯の白木の佛位牌をおまつりしています。板垣退助伯の御遺徳を偲ぶとともに、皆様の福德増進を祈願するところです。

平成三十年五月建立

（高知・高野寺住職 島田定信拝）



高知・高野寺境内の小堂

### 『板垣退助生誕地』案内板について

昨年の板垣会の総会に於いて生誕地の案内板の設置が了承された。

高知市大橋通電停南の植込みに案内板を立てるといふことで2社より図案と見積を取

り、高知市の観光課に相談、同時に補助金の申請はできないかとうかがった。

板垣会は営利目的ではないので、とやうと幕末維新博

関連の予算が十万円ある、今年度末迄に完成すればできるとのことであった。

早速現場の写真を検討していただいたが、国道沿の設置は難しいと言われ、観光課の皆さんと他に設置場所は無いが、写真をよく見ると商店街のアーケードの北面が写っていた。

観光課の職員がここが良くないかとのこと、早速天神橋通商店街の理事さんに了解をえ、事務局より事業計画、見積書、収支予算書を提出、看板屋さんよりいただいていた写真を添付、「板垣死すとも自由は死せず」の言葉も入れ年度末の3月31日左右に完成した。皆さん、ご一見ください。

（小笠原健二）



アーケードの案内板



「薩土討幕之密約記念碑」の建立について

令和元年九月二十二日(日)午後一時より、京都祇園にて「戊辰戦争一五一年・薩土討幕之密約記念碑」の建立除幕式が行われた。場所は京都市東山区清本町三六八―三。祇園K・Sメトロビル前で、建立者は石碑題辭揮毫、板垣退助玄孫・高岡功太郎、発起人・一般社団法人・秋田衆星会代表理事・秋田勘一郎、一般社団法人板垣退助先生顕彰会ならびに有志一同によるものである。



記念碑建立除幕式

当会からは会長代行谷是(副会長)と幹事楠正浩が参列した。各界三十余名の参列の中一同国歌斉唱の後、NPO法人西郷隆盛公奉賛会元会長・近畿鹿児島県人会連合会長・中野俊洋、NPO法人・中岡慎太郎先生顕彰会理事長・内藤明信、板垣退助玄孫・浅野造史の三氏により除幕が行われ、碑が現れた。高岡会長挨拶の後、一同、京都霊山護国神社に移り、宮司木村隆比古氏により祝詞奏上があ



戊辰戦争一五一年・薩土討幕之密約記念碑

り、坂本龍馬・中岡慎太郎墓前に参拝をし、同社務所の大広間にて、直会が行われた。

乾杯の指名を受けた谷が、短時間ながら、当時の社会情勢と、薩土密約同盟の歴史的意義を述べたが、板垣のゆかりの方々の発言も続き、一つのことを仕上げた関係者の苦労をたたえ板垣の敬慕に溢れた好ましい直会であった。

(谷是記)



谷が乾杯の音頭をとる  
(写真は楠正浩氏による)

## 板垣会々員募集

年会費 2,000円  
板垣退助顕彰に御協力を！  
入会は別途振込用紙をご利用  
ください。

- 2019年12月1日 発行
- 発行者 古谷 俊夫
- 発行所 高知市本町2-2-31
- 特定非営利活動法人 板垣会
- TEL (0887) 55-2860

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける  
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能

ひとときわ輝くおもてなし

# 高知 サンライズ ホテル

[www.kochi-sunrise.com](http://www.kochi-sunrise.com)

〒780-0870 高知市本町2丁目2-31 Tel 088-822-1281



明治維新、自由民権運動の主導者としてがんこなまでに民主化を進めた板垣の意思をがんこまんじゅうにたくしました。



小笠原  
小笠原

高知市本町3丁目4-6  
TEL 088-875-2430